

Title	40 : 口腔内環境と要介護高齢者の摂食嚥下機能との関連
Author(s)	野村, 真弓; 高市, 真之; 高松, ユミ; 大平, 真理子; 石田, 瞭; 茂木, 悦子; 末石, 研二; 高根, 宏
Journal	歯科学報, 114(5): 521-521
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/3443">http://hdl.handle.net/10130/3443</a>
Right	

No.39：東京歯科大学2病院矯正歯科における平成25年初診患者の動向について

加瀬利美<sup>1)</sup>, 岩本真奈美<sup>1)</sup>, 岩田周子<sup>2)</sup>, 有泉 大<sup>3)</sup>, 内田悠志<sup>3)</sup>, 野村真弓<sup>4)</sup>, 片田英憲<sup>3)</sup>,  
茂木悦子<sup>3)</sup>, 末石研二<sup>3)</sup> (東歯大・千病・歯衛)<sup>1)</sup> (東歯大・水病・歯衛)<sup>2)</sup> (東歯大・矯正)<sup>3)</sup>  
(医療法人社団徳風会高根病院歯科)<sup>4)</sup>

**目的**：東京歯科大学の千葉病院と都心の水道橋病院とには立地条件に差がある。また、平成25年は大学が千葉から水道橋へ移転した。これらの事が2病院矯正歯科にどのように影響しているかを知るため昨年に引き続き2病院の患者動向を比較し、今後の患者対応の一助とすることを目的とした。

**方法**：平成25年1年間の初診患者を対象とし、調査票、予診表等を中心として、初診患者数、性別、年齢別、精密検査受診状況、不正咬合別患者数等を調査した。

**結果**：平成25年の初診患者は千葉病院（以下千葉）911人（24年961人、以下かっこ内24年データを示す）男性321人（382人）、女性590人（579人）、水道橋病院（以下水道橋）699人（647人）男性295人（229人）、女性404人（418人）で、両病院とも女性のほうが多かった。このうち、精密検査受診者は千葉520人57.1%（509人、53.0%）、水道橋395人56.3%（347人53.6%）で、両病院とも4%程度の増加率を示した。

精密検査受診者の治療区分として、千葉・水道橋の順で、早期治療38.5%（37.8%）、13.4%（13.3%）、本格治療25.8%（31.2%）、34.5%（31.1%）、外科矯正18.7%（19.4%）36.7%（35.7%）、口蓋

裂等先天異常13.8%（9.8%）、14.4%（11.8%）、MTM2.9%（1.8%）、5.6%（6.6%）、その他0.4%（0%）、0.3%（1.4%）であった。

不正咬合分類では、千葉・水道橋の順で、上顎前突26.2%（28.3%）、21.3%（25.1%）、下顎前突24.5%（25.2%）、38.2%（33.7%）、叢生25.8%（24.7%）、47.8%（54.5%）、開咬6.3%（6.3%）、7.3%（12.4%）、過蓋咬合6.5%（5.3%）、5.1%（3.5%）、正中離開・空隙歯列弓3.0%（2.9%）、4.1%（3.7%）、交叉咬合7.7%（7.1%）、8.6%（13.3%）、切端咬合0%（0.2%）、0.3%（0%）、その他であった。

**考察**：平成24年と比較し、両病院とも精密検査受診者の増加が認められた。千葉では近隣の住宅地建設に伴い家族単位での住民の増加が小児患者の微増に影響し、水道橋では大学の移転がプラス要因として影響しているものと考えられた。早期治療患者が千葉は水道橋の約3倍で都心には児童は集まりにくい状況であり、外科矯正例は水道橋が千葉の2倍で成人が集まりやすいといえる。千葉病院が郊外ファミリー型、水道橋病院が都市型へとそれぞれの立地条件が患者層へと影響しているものと考えられ、今後の対応に参考になると考えられた。

No.40：口腔内環境と要介護高齢者の摂食嚥下機能との関連

野村真弓<sup>1)</sup>, 高市真之<sup>1)</sup>, 高松ユミ<sup>1)</sup>, 大平真理子<sup>2)</sup>, 石田 瞭<sup>2)</sup>, 茂木悦子<sup>3)</sup>, 末石研二<sup>3)</sup>,  
高根 宏<sup>4)</sup> (医療法人社団徳風会高根病院歯科)<sup>1)</sup> (東歯大・千病・摂食・嚥下リハ)<sup>2)</sup>  
(東歯大・矯正)<sup>3)</sup> (医療法人社団徳風会高根病院外科)<sup>4)</sup>

**目的**：口腔は消化管の入り口であり、口から食べることは高齢者のQOLの向上に大きな役割を果たし、介護施設入所者における口腔機能の把握は必要であると考えられる。今回、要介護者の現在歯数や義歯の有無等の口腔内環境と嚥下障害ならびに誤嚥の関連を知るため Giselle Mannらによって作られた臨床評価尺度である摂食・嚥下機能検査 The Mann Assessment of Swallowing Ability（以下 MASA と略す）を用いて評価したので報告する。

**方法**：成田市内にある特別養護老人ホーム入所者80名（71～103歳）の施設において、同意の得られた男性2名、女性13名、合計15名、平均年齢87.5歳（71～96歳）を対象とした。

口腔内環境では口腔内清掃状況を Eilers 口腔アセスメントガイドに準じて行い、現在歯数や義歯の有無等について調査した。

摂食・嚥下機能の評価である MASA は24項目で構成され満点は200点となり、機能力が高ければ高得点となる。調査時間はおよそ20分で、普段食べて

いる食形態と水を用いて歯科医師が評価を行った。

**結果および考察**：現在歯数は0～26本、平均歯数12.5歯であった。義歯使用者9名は歯数が0～24歯であった。要介護度は1～5を示した。MASA 合計点は平均187.5点（150点～200点）を示し、嚥下障害ならびに誤嚥の可能性は低かった。Mann によれば170点以下は嚥下障害ならびに誤嚥の可能性があると述べている。今回、MASA 合計点が170点以下は2名であり、150点、153点を示し、これらは認知機能の低下が認められた者であった。MASA 合計点と現在歯数については相関を認めなかった（ $r = 0.32$ ）。

対象者は高血圧、脳血管障害、心疾患、消化器疾患、糖尿病等なんらかの基礎疾患を有している者がみられた。現在歯数や義歯の使用の有無と摂食嚥下機能について関連性が低かったのは、脳血管障害等の基礎疾患や認知度が影響しているのではないかと考えられる。